

セブ島 第7回目の『僕の村』(1ヶ月間)

(身障者の方にセブの海の楽しさを、セブの子供に楽器の楽しさを)

ISP: (International SCUBA Peasant)

国際 鈍(ドン)百姓 ダイバー

伊原 昭男



お友達、ホークビル海亀



可愛い カエルアンコウ



カクレマノミ

今回、セブ島7回目の滞在(09/2/12-3/12)では、3組の仲間が、それぞれ1週間から10日間『僕の村』に来てくださった。

① 前回暮れに来てくれた千葉高同級生の MASA は、今回は大学生の息子、HIRO 君(20歳)同伴だ。HIRO は初心者ライセンスを、お父さんよりも早く、かつ優秀な成績で取得した。流石、若いスポーツマン。

② 出向先の仕事で知りあった、東工大の先輩、NOB & NAO ご夫妻も来て下さった。奥様 NAO は避寒を兼ねて『僕の村』でゆっくりされていたが、先輩の NOB は私より10歳近く年上であるのに、果敢にライセンスに挑戦し、見事に初心者ライセンスを取得された。グライダーの免許を持っているだけあって、「空間」でのバランス感覚がいい。

③ 最後に妹も来てくれた。妹は、昨年10月、娘(私の姪)の結婚式でサイパンに渡った機会に、初心者ライセンスを取ったばかりである。最初の1本目では、余りに「素人」なので、サイパンで何を習ったのかと疑ったが、今回の、お兄さんの厳しい特訓で中性浮力が明らかに改善した。

仲間たちが帰国した後、「JBDA」の皆様との接触は、私にとって生涯に残る、初めての体験であった。ダイビングの分野で、「人」として、大変貴重な経験をさせていただいたことに心より感謝したい。

JBDA とは、沖縄に本部を置く、日本の「身体障害者」(以下、身障者)達のダイビング団体である。皆さんは、「身障者のダイビング」と聞くと、きっと「健全者でも事故が起きると命に関わるような危険なスポーツを、なぜ身障者ができるのだ?」と、思うだろう。

さらに、「身障者のダイビング?、危険を省みない無謀な冒険家達!」と思うのではないだろうか。

この身障者のダイビングについて、私にはある「感激」と言うか、強い「思い入れ」がある。

まずは、その「思い入れ」をお話させていただきたい。

[身体障害者とダイビング]

昔、まだまだ初心者の頃、伊豆に行き、これから潜ろうと機材の準備をしていた時である。隣に、なんとなく気にかかる、ダイバー・グループがいた。
「なんとなく気にかかる」と言うのは、どうも変なのだ！　なんか、静かなのだ！
気にかかるので、遠めに、しばらく彼らを見ていた。

すると、気にかかる、その訳が分かった。
「ええっ！　何！　そっかあー！」、彼らは『手話』を使っているのだ。そして思った。
「あー！　あの人は、聾啞者のグループだ！　障害を押して「海の中まで」、大変だなあ！」と。
そして、その瞬間思ったのだ！！。
「オー！！、彼らは水の中でもコミュニケーションができるんだ！！」
この事実は、コロンブスの卵だが、私にとっては「大発見」であった。
「そっかあー！！　地上でのハンディが、水中ではアドバンテージになるんだあ！！」
この時の「感激」を思い出すと、今でも、自分のことのように、嬉しくなり、熱くなってしまう。

そして、今回の『僕の村』での貴重な体験だ。
その「感激」と「思い入れ」が、さらに強まったのである。
「ダイビングは、身体障害者が出来る数少ないスポーツの一つなのだ」と。
「この貴重な機会を、身体の不自由な人たちから、絶対に奪ってはならない！！」と。
「彼らには野球もサッカーも出来ない。でも、この『水の中』の世界では、体重が無くなるのである。
こんな世界は、『水の中』と『宇宙』だけだ。確かに空気をレギュレータから吸わなくてはならないが、それを克服すれば、この人たちは重い体重を自分で支えなくてもいい。スポーツができるのだ。足が動かなくても、大自然を楽しむことが出来るのだ。ダイビングは身体が不自由な人たちが『大自然』と肌で接することのできる、数少ない機会の一つなのだ。」と。
今回、私はそれを再確認し、そして、心から熱く燃えた。

『僕の村』ショップでは、ヨーロッパからの身障者が、時々やってくる。
『僕のショップ』の経営者カールからスタッフまで、みんなが身障者に理解を示し、暖かいからであろう。
今回も、私が到着する2週間前まで、左半身不随のドイツ人が滞在していたそうだ。
彼のダイビングには、私と同じ「助っ人 DM」のミレイユというドイツ人女性が付き添った。
また、以前、私が帰国する直前に、片足のスウェーデン人が来て、私と同じ先生ディノからダイブ・マスター（DM）の講習を受け始めたことがある。（彼はスウェーデンの軍隊の事故で片足をなくしたと言っていた。）
後でディノから聞いた話では、彼も無事、DM を取得し、私の弟・弟子になったらいい。
（余談だが、この時のエピソードが残っている。スタミナ試験の「水泳400mフリー」（10分以内）で、彼はディノと競争した。彼の右足は、膝から下が「義足」である。そして結果は？
「先生であるディノが負けた」、そうだ。）
（ついでながら、言わせていただくと、私もディノ先生に勝った。私の場合は、千葉高水泳部のお陰である。）

「ダイビングが身障者に優しい」という話のついでに、(チョット反れて)、もう一つの話を紹介しよう。
千葉高同級生の MASA も、前回の HIRO (MASA の息子の方ではない) も、共に「腰痛持ち」で、それも症状

がかなりひどいようだ。二人ともゴルフが非常に好きなのに、本当に気の毒だと思う。
だが、彼らが共通に口にする言葉は、「水の中に入っていると、腰痛のことを忘れてられる。」というものだ。
身障者ばかりでなく、腰痛の人間にとっても、ダイビングは「人」に優しい全身スポーツである。

[大プロジェクト]

さて、この身障者達のダイビング受け入れという「大プロジェクト」、(私には大きな挑戦だったので、こう呼ばせてもらうが)、これには久々に燃えた。

この「大プロジェクト」のいきさつはこうだ。

2月12日の夜中、セブ島『僕の村』に到着し、翌朝13日に『僕のショップ』に顔を出した。
この時、事務局のおばちゃん、アベットが、私の予定をしっかりと把握して、それを確認してきた。
「アキオ、3月5日に妹さん達が帰った後は、日本からの友達はもう来ないでしょ？」と。
「うん、5日以降は身体が空いているから、いくらでもお手伝いできるよ。」と答えた。
「そう、じゃあ、ちょっとお願いすることになるかも知れないわ。」ってな簡単なスケジュール確認だった。
(思うに、このときには既に、私もこの「大プロジェクト」に組み込まれていたようである。)

そして、その後、店長のハーマンから、「大プロジェクト」の中身を、初めて正式に聞いたのである。

「ある人のコネで、日本から、身障者のグループが来ることになっている。

アキオにも、是非手伝ってもらいたい。身体は空いているだろう？

→(ああ、いいよ。僕にできることなら、喜んで手伝うよ。)

日本からのこのグループは合計12名だ。9名の身障者の他、3名の健常者が「お付き」で来る。

9名の身障者の内、4人は完全に下半身が麻痺状態で動かない、2人は股関節脱臼などで杖を付いて歩けるが水の中ではフィンは蹴れないだろう。1人は81歳の高齢で心臓ペースメーカーを使っている。さらに1人はかなりの弱視、さらにもうひとり、人工肛門装着……。

とにかく9名全員が、なにがしかの障害を持っている。あとで、リストを渡す。

全員がダイビング・ライセンスを保有しているが、超初心者が5人いて、4人はダイビング暦が8本、1人は12本、残りは50本以上潜っている。中には、400本以上を潜っているアドバンスト・ダイバーもいる。

全員が医者や看護師のダイビング許可証を持っている。

当方の日本人の通訳にも参加してもらうが、なんせ数が多いのでDMのアキオにも是非手伝ってほしい。」というのである。

翌日、ショップの関係者たちと話した。

中には、非常に責任感が強くて、本件に強く反対する立場の人が居ることも分かった。

「我々だけで一体何が出来るのか？、何か起きたら誰が責任を取るのか？」と、かなり心配され、

「1人、2人ならまだしも、このような大勢は、断じて引き受けるべきでない」という考えであった。

受け入れに大反対している人がいるとの話は、ハーマンから聞いていなかった。

しかし、先に述べたように、私の中には身障者のダイビングについて、深い「思い入れ」がある。

「ダイビングは、身障者が出来る数少ないスポーツの一つだ。この貴重な機会を、身体の不自由な人たちが

ら絶対に奪ってなるものか！！」との思いである。

そして、私は今回の大プロジェクトを、この未知の試みを、前向きに捕らえることにし、その旨ハーマンに話した。

1週間ほどして、今度は、経営者のカールから直接、話を聞いた。

「このような身障者の『グループ』を引き受けるのは、まったく初めての試みだ。

アキオ！ 貴方が頼りだ。全体の「チーム・リーダー」をやってほしい。

スタッフには、ガイドとして、オスティン、ハイミー、ラリーの慣れた3人を振り当てる。

日本からの付き添いの健常者3名を含め、水中ではアキオを含めて合計7名だ。

(最後尾にはアシスタントも付くことになるだろう。この場合は合計8名だ。)

さらにボート上には、今回新しく雇った2人の若い男を配置する、彼らは力仕事に使えるはずだ。

またボートのパイロットは熟練者のライオン。これら当方からの、7名全員を自由に使っていい。

身障者のボートへの引き上げ方については、過去の経験から学んだ「いい方法」があるので後で教える。

初日には私も全面的に参加するので、貴方のスタッフの一人として、私にも役割を振ってもらいたい。

貴方が「リーダー」だ。是非、引き受けてほしい。」

そして、さらに、頼まれた。

「大変申し訳ないが、セブシティの空港まで、ドライバーのエドモンと迎えに行ってもらいたい。

空港からはこの村までバスを手配してあるので、それに全員を乗せて連れて来てほしい。」と。

乗りかかった船だ、同じ引き受けるなら気持ちよく、と思い、

「よく分かった、全く初めての挑戦だか、全力を尽くそう。」と返事をした。

こうして、燃える「プロジェクト・リーダー」(こう呼ばせてほしい。)の仕事、全てが始まったのである。

後で分かったことであるが、この身障者プロジェクトの2日目からは、既に長期滞在しているお客様の他に、新たにイタリア人・グループ17人、ドイツ人グループ12人の予約が入っていたのだ。

後日、ハーマン曰く、

「その後も予約申し込みが続き、現地での飛び入り予約を含め、このプロジェクト中に合計10人以上の受け入れを断った。」とのことだった。

因みに、この時期、日本人ショップをはじめ、他のショップでは閑古鳥が鳴いていて、彼らのボートはブイに繋がられっぱなしであった。そんな中、『僕のショップ』だけは大入り超満員(お客さんは60名を超えた)であり、全員が超多忙を究めていたのである。

もちろん、店長ハーマン以下、リンディ、ディノ、ユーゼルのDMは全て他のお客様のためにフル稼働していた。

また、私のような「助っ人DM」であるドミニック、アンディ、ミレイユなども、全員が直接お客様を受け持ち、『僕のショップ』に全面協力していた。

ボートは、ショップ自前の2隻では当然足らず、ボートマン付きでさらに2隻をレンタルしていた。

このような状況下であるにも関わらず、カールは日本からの身障者たちのために、私を含め総勢8名もの人的リソースを割き、ボート1隻を占有させてくれたのである。

(しかも、カールは、一切の「追加料金」や「割増料金」を求めることをしなかった。)

あのカールの、経営者としての「勇断」に対し、心から厚く敬意を表したい。

[チームワーク]

プロジェクト開始当日、彼らを出迎えにエドモンの車で空港に着いたのは夕方である。そして、バスに乗り移り、添乗員さながら『僕の村』を車内案内しつつ、ホテルに到着したのは、午後10時半を過ぎていた。

ところが、こんなに夜遅く、どこで聞き及んだのか、大勢の村人が出迎え、『僕のショップ』スタッフ達も大勢が待ち構えてくれたのである。まるで、村の「お祭り」でも始まるかのような人手である。

日本から「身障者グループ」がやってくるというので集まってきた人ばかりだ。

決して物見客や野次馬ではない、なにか手伝うものはないか、と集まってきた人たちである。

その証拠に、みんなが、身障者一人一人のチェックインを総出で手伝ってくれたのである。

だーれもチップを求めない。（いつも思うのだが、「チップ」はいやらしい「アメリカ文化」で私は嫌いだ。）

荷物がどんどん部屋に運び込まれていく。

想定外のハプニングがあっても全く問題にならない。

応用問題なんか「へっちゃら」だ、皆が協力してその場で片付けてしまう。こうなったら、しめたもの。

例えば、予約しておいた、ある部屋の前が「砂利」敷きで車椅子が通れないことが分かった。入り口に「段差」のない部屋を手配しておいたのだが、「段差」よりも「砂利」敷きの方が不便であることを知らなかった。

そこで、急遽部屋を変更することになり、私が「OK、では部屋を換えるぞ！」と叫んだ瞬間、一旦運び込まれた大きな荷物が、あれよあれよと別の部屋に移動する。細かな指示など、まったく必要ない。まるで、蟻の行列のようだった。

これには感激だった。

みんなが、こんなに遅くまで待ち構えてくれ、歓迎してくれ、自分で考え、手分けして手伝ってくれたのである。

私はこの光景を目の当たりにして、プロジェクト・リーダーとして、これからの大プロジェクトの幸先のいいスタートと、完璧なチームワークを予感したのである。

過去の経験から言っても、「プロジェクト」というものは、全員のベクトルを揃え、互いに協力し合える「体制」を作ることが最重要である。言うならば、プロジェクト・リーダーの使命は、これに尽きる、と思っている。

以前、テレコミュニケーション・エンジニアとして、様々なプロジェクトを任せていただいた。

2002年「日韓 FIFA ワールドカップ」のサッカー試合の映像を連日世界500局以上の放送会社に独占伝送したプロジェクト、2003年「南極の果てから世界初ハイビジョン映像」を1年間独占中継したプロジェクト、そして2004年「アテネオリンピック」の競技全試合の映像を日本の放送局全社に送り届けたプロジェクトなどなど、どれを取っても、スタッフ全員のベクトルが揃い、チームワーク良く、互いに協力し合って乗り越えてきた。

プロジェクト・リーダーとは、所詮、自分では何一つオペレーションができないのだ。事が起きて、いちいち細かな指示を出してはられない。ただただ、部下の能力を信じ、部下のやる気を高め、全体のコミュニケーションを取り、いつでも現場で「応用問題」に即応できる「環境」を整えることしかできないのである。

久々に、燃える「大プロジェクト」を任せていただき、経営者カールには深く感謝したい。

[身障者の水の中]

身障者が、ボートから海に入るのはそれほど難しくない。

失礼だが、極端な言い方をすれば、「放り込む」要領でことが足りる。

(われわれ健常者も、バックロールと言って、後ろ向きに、頭から転げ落ちるように飛び込むのである。)

問題は、ダイビングの後、彼らをどのようにボートに上げるのか、身障者を如何に安全にボートに戻すかである。

足の届かない水の中では、何人で持ち上げても、人間一人をボートに持ち上げることもなんかできない。

身障者を安全にボートに引き上げる方法を、カールは初日にスタッフ全員に実地指導した。

詳細は省くが、この方法を使って、私自身も実際に引き上げてもらった。

これが、なかなか快適で、安全である。

これからは、私もいつもこんな風に引き上げてくれないかなあ、と思ったほどだ。

さていよいよ、最初のダイビングだ。

海底が水深5m程度の浅い砂地のポイントで、ダイビング感覚を思い出してもらうための「チェックアップ・ダイブ」を兼ねて潜ることにした。

私は、ダイブ暦12本の初心者男性と一緒に潜り、彼を見ることにした。彼は転がるようにしてボートから海中に落ちた。そして、そのまま水中で中性浮力を取ろうとして、水面と海底を何度も上下している。

初めての光景に遭遇し、さて私はどうしたらいいものやら分からない。

「すぐに行って手を差し出すべきか。否、自分でやろうとしているのに、すぐに手を出しては失礼ではないか。」

他の身障者を見ると、既に自分の腕だけで泳いでいる者もいれば、インストラクターに完全に頼りきっているものもある。要は、人によって様々である。

「そうかあ、人それぞれ、障害の度合いやダイビングの力量によって、サポート方法が違うんだあ。」

そこで、私のパートナーはどうか？ 別に溺れているわけではないので、しばらく様子を見ることにした。

中性浮力は水面から5mまでの浅いところが最も難しい。正に彼はその難しい水深で、盛んにBCジャケットに空気を入れたり抜いたりして、中性浮力を取ろうと頑張っている(もがいている)。彼の両足は全く動かない。フィンを使ってキックすることが全くできないのだ。したがって、身体が沈んで(落ちて)行くのをフィンで蹴って、沈むのを食い止めることができないのだ。

言い換えれば、フィンを使って、あたかも中性浮力が取れているような「ごまかし」が効かないのである。

健常者の初心者は、ほとんどが、この「ごまかし」をやって、中性浮力を取ったような気になっている。

しかし、彼らはフィンを使えない、しかも『全く』使えないので、フィンによる「ごまかし」が一切効かず、完璧な中性浮力を自分で見つけ出すしかないのである。

余談だが、今回気付いた事実は、『身障者ダイバーは中性浮力を取るのが非常に上手い。』ということだ。

しかも、DM並みに、『とんでもなく上手い』のである。

これは、今回見つけた、二つ目の「大発見」である。

変な例えだが、目の悪い人が嗅覚や触覚が鋭くなるようなものかも知れない。

身障者ダイバーはフィンを使って「ごまかす」ことができないので、完璧な中性浮力を早く習得する。

ところで、僕の相棒(その男性)は、見る見るうちに中性浮力を上手く体感し、バランスを取り始めた。

「これなら大丈夫だ。」

そのうち、彼は「手」を使い、平泳ぎの「手」だけで、自分の好きなのところにゆっくりと移動し始めた。

ただ、潮がある場所では、平泳ぎの手だけでは、潮に逆らって移動できないので、私が後から彼のタンクをつかみ、潮に流されないようにサポートすることした。

「これで一安心」と思ったのもつかの間、最も重度の身障者を抱えている、日本からの付き添いインストラクターが、ジェスチャーで、「お前の『ウェイト』をくれ」と言ってきたのである。

彼が看着いる重度障害の女性のウェイトが足りず、彼女の身体が浮かんでしまうのだ。

「ええっ！！ うっそだろう！！ 俺のウェイトを持って行くの？ やめてよ。」と躊躇している、先方は「早くよこせ！！」と催促している。

「もう！！ しょうがないなあ！！」と観念して、ウェイト・ベルトを外し、彼に渡した。

その瞬間、自分の身体が浮き始める、あわてて足を上にして、フィンで上向きにキックをする。

当然、運動量が激しくなるが、深く呼吸ができない。深く息を吸うと身体が浮いてしまうのだ。

前回(第6回)のセブ島報告で、ボートにウェイトを忘れたまま飛び込んでしまい、お客さんを連れていた手前、そのまま50分以上潜り続けた「大失敗」談を書いた。

しかし、今回のように、自分で意識してウェイトを外した(取られた)のは初めてである。

前回の経験があるとは言え、やっぱり、「ウェイトなし」で潜り続けるのは、苦しくて辛い。



ボートに乗って、さあ出発。



大プロジェクトのメンバー全員

[あの島に連れて行きたい]

チームとして意見が割れ、私の決断を求められたのは、沖の無人島に行くか行かないかの決断である。この要求は、何を隠そう、私自身が言い出したものだ。

この無人島は、ボートで15分、目の前に見えている、世界屈指の有名ダイビング・ポイントである。

『僕の村』にダイビングに来る人は、このポイントに潜るためにやって来る、と言って過言ではない。

もちろん、今回の人たちもそのポイント名は知っているし、評判も聞いている。

でも、……

「あの島は、世界でも名高いダイビング・ポイントですが、潮が強く、危ないから、皆さんはお連れするわけにはいきません。」と断ってしまうことは、余りにも簡単だ。

『僕の村』に来たのに、しかも目の前に見えているのに、このまま帰してしまってもいいものか？

「何とか見せて差し上げたい。何とかならないか。」という思いが日ごとに募ってきた。

このグループの日程には、この無人島に案内する予定は入っていない。

「でも何とか連れて行ってあげたい。不自由な身体をおして、わざわざ日本から来たお客さんだ。」

日程はドンドン過ぎていく。

そして、ついに、ベテランのオスティンに相談した。「なんとかあの島にお連れできないか！」

オスティンは、この「応用問題」を非常に前向きに捕らえ、考えてくれた。

しかし、この時も、リスクが高い過ぎるとの反対意見があり、大論議をして、かなり気まずい思いをした。

結局、私としては、天候も良いし波もないので、オスティンの「経験」と潮を読む「力量」を信じ、半ば強制的に島に行くことに決めた。

島に着くと、オスティンは、パイロットのライアンに命じて、ボートをゆっくり、島の周りを1週させた。

彼は、入念に、ずっーと、水を覗き込んでいる。

そして「ここぞ」と思った箇所、ライアンにボートを止めさせ、ブイに固定させた。

オスティンが飛び込み、私が飛び込んだ。

「うん、これなら行ける！ 大丈夫だ！」 ついでに、鮫の赤ちゃんの居場所も確認できた。

そして、全員が、水の中に落ちた(入った)。

今回は、オスティンのペアを先頭に立て、全員一丸となって潜ることにした。

結果は、大成功！！

オスティンを筆頭に全員が、島を1／3周した。

潮目が変わるポイントで、彼は勇気を持って引き返し、その後、珊瑚のお花畑をみんなで散策した。

手前で引き返したため、大きなカエルアンコウこそ見られなかったが、サメの赤ちゃん(ホワイトチップ)を見せて差し上げられたし、お花畑の珊瑚礁を満喫していただいた。

オスティンは完璧な仕事をした。

皆さんには、心より喜んでいただき、深く感謝をしていただき、スタッフ一同、本当に嬉しかった。

(余談だか、この日を最後に、赤ちゃんザメは見られなくなってしまった。漁師に釣られてしまったのかも知れない。赤ちゃんザメのラスト・チャンスを皆さんに見ていただけたのも、きっと大自然からのプレゼントであろう。)

プロジェクト終了後、内輪の話で申し訳ないが、経営者カールから、また店長ハーマンからも、

「アキオなしでは、今回のこのプロジェクトはまったく成功しなかった」と幾度も感謝された。

「このようなプロジェクトは、この村ではもちろんのこと、セブ島全体でも初めての試みだったろう。アキオにはここから感謝する。」と言ってくれた。

プロジェクトというもの、この一言のために燃えるものなのだ。

[楽器演奏の普及]

今回、日本を出発する直前、妹から電話があった。

「お兄さん、今度セブ島でお世話になるけど、地元の小学校に楽器などを寄付したら喜ばれる？

今回はひとりでお邪魔するので、そんなに沢山は運べないけど、先方が喜びそうなら、少しだけでも持って行って、学校の音楽の先生とお話ができないかな？

その辺の感触だけでも先に調べて、私の出発前までにメールをくれない？」

というのである。

今回、初めて来てくれた妹は、ダイビングはまだ初心者だが、長年ピアノの先生をやっている。

彼女には、ピアノの先生たちの私的仲間、言うなれば「同業者」仲間がいて、時々、開発途上国の、小学校や身障者たちの施設を訪問し、自分たちの演奏を聞かせたり、楽器をプレゼントするなどして、音楽の楽しさを知ってもらおうと、(身内を褒めて申し訳ないが)、なかなか感心な活動を行っている。

去年は、このお仲間8人で、スリランカの僻地を巡り、小学校や養護学校などで、ミュージック・ベルの演奏会を行い、楽器・文房具を寄付し、地元のラジオ番組にまで出演している。

(さすが、僻地には「ピアノ」がないので、自分たちの得意な「ピアノ演奏」はできないのだが・・・。)

今度、せっかくセブ島の、素朴な『僕の村』に行くので、地元の子供たちに生の演奏を聴いてもらい、楽器を寄付して自分達で音楽を奏でる、そんな楽しさを知ってもらおう機会を作りたいというのだ。

そして、今回はその事前調べで、現地の音楽教育の環境や人々の関心度を知りたい、うまく行けば次回以降、お仲間の「同業者」と一緒に小さな演奏会を開いたり、楽器を寄付したり、簡単な指導をして、音楽を普及したいというのだ。

「結構、難題だなあ。どこから取り組めばいいのか皆目検討もつかないけど、なんとかやってみよう。まあ、あんまり期待しないで待ってて。」ということで、私は日本を出発した。

さて、『僕の村』に着いてからは、先ほどの「大プロジェクト」の話もあったが、毎日潜りながら、こっちの話も気がかりだった。いろいろ学校のことを聞いて調べているうちに、身近なディノ(私のDMの先生)が、地元の小学校のPTA委員をやっていることを知り、早速掛け合ってみた。

彼はこの話を積極的に捉えてくれて、校長先生と掛け合い、妹が到着したのある時点で、われわれとの会合を設定してくれたのである。

[校長先生との面会]

さて、その当日、午後のダイビングを取りやめて、妹とディノの車で小学校に向かった。

(途中、子供たちが派手な衣装に身を包み、学校に向かうのを幾人も見た。)

会合出席者は、校長、副校長、ディノそして我々2人である。

今回の会合目的、妹たちの過去の活動実績、今考えているこちらのプラン、などなどを説明した。

すると、校長は、すっかり乗り気になり、

「是非、この小学校で演奏会をやろう。この学校でやりたいから、よろしく頼む。演奏してくれる先生

方の名前を全員載せてプログラムを作って皆に配る。市長か、少なくとも「市」の教育長を招待して、皆さんと子供たちの演奏会を企画する。こんなスリリングな話は初めてだ。時期はいつだ？ 予定表に書き込んで準備を進める。」というのだ。

「ちょっと待ってください。今回は下調べで、他の先生たちの都合もあるので、いまここで決めることはできない。」と、こっちが多少引いてしまうほど、先方は乗り気であった。

10分間くらいの話し合いの予定が、あっという間に30分を過ぎてしまった。

すると、副校長がなにやら校長を促している。

「これはお忙しいところ、申し訳ない」と、こちらが席を立とうとしたら、校長が、

「子供たちをスタンバイさせているので、是非この学校の子供たちの演奏を聴いてほしい。」というのだ。

「ええっ！ 我々のために子供たちをすでに(30分以上も)スタンバイさせているの？？」

それは申し訳なかった。」と、慌てて、校長・副校長に連れられて、校庭に出た。

なんと、大勢の子供たちが楽団の「衣装」に身を包み、妹と私を待ちわびてザワついている。

ディノの車で小学校に来る途中、派手な格好をした子供たちはこの楽団のメンバーだったのだ。

なんと学校と子供たちは、『我々2人のために』、自分たちの演奏を披露してくれるというのだ。

小さな1年生から6年生まで、各クラスから選ばれた優秀な85名の楽団だった。

のんびりした「地元の学校」とは言え、日本からのおじさんとおばさんのために、お昼休みに自宅で着替え、演奏会を開いてくれたのだ。

楽団の最前列には、ディノの子供、マルビンがいた。

マルビンはこの学校始まって以来の秀才、優等生らしい。

校長からも、リーダー役のマルビンが卒業した後の後継者がなかなか見つからないとの話を聞いた。

ディノからは、「3月末の卒業式には、マルビンが市から最高の賞を受賞することになっている。

レッチョン・バブイ(豚の丸焼きパーティ)をやるので、アキオ、あと2週間滞在を延長できないか。」

と幾度も誘われた。

そのマルビンが、いつもは非常に恥ずかしがり屋なのに、今日は誇らしげに演奏している。



屋外のステージで、(中央:マルビン)



雨上がりの校庭でも、演奏とダンス

演奏が終わった後、校長が子供たちを呼び集め、我々の周りに円陣を組ませた。

校長が我々を紹介し、ディノが今回、妹が持ち込んだ楽器の説明をする。

妹が持参した楽器は、リコーダ(縦笛)5本、メロディアン(口で息を吹き込む小型オルガン)2品である。ディノから、「これを使って1曲、お願い!!」というので、妹は即興でそれぞれ、小曲を2・3曲吹く。(私も妹の演奏するメロディアンに合わせ、1曲歌わせてもらった。)

ディノが「どうだ! いい音だろう! この楽器をほしい人!!」と手を上げると、子供たちは一斉に「YE-S」と言って、全員が手を上げた。



(リコーダ)
妹が即興で小曲を披露した。
(メロディアン)

さて、この小さな、素朴な、田舎の小学校の現状だが、「音楽の授業」というものがない。クラスの優秀な子供だけが、この楽団に入って、放課後に楽器に触れられる。選別された85名も、半分以上は楽器を持たず、周りでリズムに併せて踊っている。楽器が高い(高価な)ので、全員に回らないのだ。楽器と言っても、ほとんどがドラムなどの打楽器だ。リズム感の練習にはなるが、「旋律」がない。「旋律」は、日本で「ベルリラ」と呼ばれる小さな鉄琴を立てたような楽器だけで、高学年生だけが演奏している。(もちろんマルピンが演奏していたのは、ベルリラである。)

「演奏が単調で、音楽的な『ふくらみ』がない。もう少し、旋律楽器を加えれば、遥かに豊かな演奏ができるのに・・・。」というのが妹の感想であった。

妹の持ち込んだ楽器全てを校長先生に預け(寄付して)、先生方と握手をして小学校を引き払った。次回、この音楽会を実現する「プロジェクト」を是非実現したいものである。

[その他]

前回、何度もワルツと楽しんだ、あのおじいちゃん海亀とは、今回は1度だけ会った。私の「亀」の先生、英国人のアバーが、ロンドンに帰省している間、おじいちゃん亀とは一度も会えなかった。不思議なことに、アバーが帰国し、『僕のショップ』に顔を出したその日、あの大きなおじいちゃん亀に出会うことができたのだ。怪我でもしてないか、とても心配したが、元気な様子で何よりである。そのことをアバーに報告したら、彼は大喜びであった。

面白い体験では、大プロジェクトの後、2日間ばかり17人組のイタリア人グループを手伝った。ディノから任された6人を案内しているうち、2人が勝手に無断でディノのグループに合流してしまったのだ。私は非常に心配して、残りの4人をボートに上げたあと、1人でルートを逆戻りして捜した。「やっぱり、イタリア人！」と、一時は腹を立てたが・・・、この2人、他の4人にこっぴどく怒られたようで、後から私に丁寧に謝りに来た。この2人も、根は典型的な陽気なイタリア人で、ひょうきんな楽道家である。その晩、隣の居酒屋で私がドイツ人と飲んでいたら、「アキオが居る」と言ってこのイタリア人17人が入ってきた。彼らがイタリアの歌を歌っていたので、「4ヶ国対抗『歌合戦』をやらないか」と持ちかけた。これが受けて、イタリア人17名、ドイツ人4人、現地のフィリピン人4人、そして日本人私1人の4ヶ国歌合戦は大いに盛り上がった。勝手に消えた、あの2人も声がいい。みんな、根は明るい楽しい仲間である。

さらに、今回、フランス人ダイバー1人を、本格的に丸2日間も案内をした。彼は3000本以上潜っている、「超ベテラン」だ。年は私より1歳上で、「インストラクター」だ。ハーマンから、「アキオ、奴は英語ができない。フランス語しかできないから、頼む！！」と言われて任された。「ええっ！ フランス語だけで1日中付き合うのかあ！ きついなあ！」とは思ったが、他に人が居ないからしかたがない。「まっ、なんとかかなるだろう。」ダイビング前のブリーフィングでは、汗かき、必死で、ポイントの事前説明をした。最後に、「3000本も潜っているインストラクターを案内するのは、非常に名誉なことだけど、・・・貴方にはガイドなんて必要ないだろう？」と言ったら、「ノン、ノン、ノン、私はここの地形が分からない。君がリーダーだ。私はどこへでも、君について行く。水深50mでも、60mでも。おもしろいところを案内してほしい。」と来た。確かにその通りだ。私も初めてのポイントは、必ずガイドをつけるだろう。

そこで、彼を案内しながら、おもしろいと思われるものを金属のポインターで指し示す。ニチリンダテハゼとテッポウエビの共生、赤ちゃん鮫、大きなカエルアンコウなどなどを指し示したが、今一興味を示さない。「そっかー、流石3000本ダイバー、見慣れているんかあ、難しい客だなあ。」と思って、何気なく側にいた超猛毒の「ウミヘビ」を指した。彼は俄然興味を示し、余り近づき過ぎないように注意しながら、何枚も写真を取っている。「なーんだ、ウミヘビなんかが珍しいのか？」さらに、彼が驚いたのは、例のおじいちゃん亀と私が、手とひれとを取り合って、ダンスをしたときだ。彼は完璧にまいて(驚いて)、固まって、長い間カメラをこちらに向けているのが分かった。後で見せてくれたが、かれはこの時、同じカメラだが、「動画」を取っていたのだ。約20秒間、海亀と私とが踊っている。我ながら、自分でも感激した動画シーンだった。



超・猛毒のウミヘビ



体長80cmのギンガメアジの大群

[パーティ三昧]

以前にも書いたが、『僕のショップ』では長期滞在者を含め仲間たちで、しょっちゅうパーティや夕食会を開く。前回2ヶ月間の滞在では、レッチョン・バブイ(豚の丸焼き)パーティが5回あったが、今回も2回(ハーマンの子供マチューの誕生日会と自分の誕生日会)があり、皆と深夜まで楽しんだ。

2回ともにハーマン宅でのパーティで、奥さんのビービーが毎回料理の腕を振るってくれる。

私のゴッド・ドーター、小さな赤ちゃんビアンカを抱えながら、ビービーは正に「セブ島の肝っ玉母さん」である。

59歳の私の誕生日パーティには、先輩のNOB&NAO 夫妻と妹も参加してくれ、経営者のカール夫妻は大きな蘭の花束を持って来てくれたほか、スタッフ、長期滞在者など約40名が祝ってくれた。

今回はスタッフの奥さん、ガールフレンド、子供たちも招待し、ビービーに頼んでアイスクリームも用意してもらったが、2家族が参加してくれたほかは、奥さんや子供たちの夜のパーティへの参加はなかった。

次回は昼間のパーティを考えたい。



レッチョンバブイ(豚の丸焼き)



経営者カール夫妻から花束を受ける

ディノ宅では、MASA の主催で、息子 HIRO のライセンス取得祝いの「鳥・魚 BBQ」パーティが盛大に開催され、さらに、その後私は個別に、「刺身」パーティに2度招待された。

お酒の飲めない先輩 NOB のライセンス取得祝いは、ショップで BBQ パーティをした。

また、ドイツ人の弟・弟子アンディが(生きた)山羊を買ってきたというので、ビービーがそれをさばき「山羊肉」パーティを開いたり、今回初めて知り合った地元人の誕生日会では、「キニラオ」(フィリピン風刺身)をごちそうになったり、珍しい「雄鶏 BBQ」(肉は硬いが味が濃くて旨い)を楽しんだ。

相変わらず、パーティ三昧の滞在である。

さて、私自身の次の予定は、10月末～12月末を考えています。

皆さんも、是非、『僕の村』に、いらっしやいませんか？

akio (^:^(